

# 小豆澤館跡

## 発掘調査報告書

1994

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

あ　づ　き　さ　わ　た　て

# 小豆澤館跡

## 発掘調査報告書

平成 6 年 3 月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

## 序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、小豆澤館跡の調査成果をまとめたものです。

小豆澤館跡は、山形県の南部に位置する長井市にあります。長井市は西側を朝日連峰に接し、東側を最上川及びその支流の野川、白川が流れる緑豊かな街です。

調査では、小豆澤館跡の張り出し部から見張り台のような建物跡と、縄文時代の土器や石器が発見されました。発掘面積は多くありませんが、室町時代ころの城や館跡を理解するうえでよい資料を得ることができました。

埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な遺産といえます。私たちは国民的財産の文化財を大切に保護し、さらに郷土の歴史の中で培われた文化を後世に引き継がねばなりません。一方、平和で豊かなくらしは私たちが等しく切望しているところです。近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。

事業区内の遺跡の調査は、埋蔵文化財保護と開発事業実施のため、適切かつ迅速に行われる方が今日求められています。こうした要請に適切に対処するとともに埋蔵文化財調査体制の充実を図ることが急務とされ、平成5年4月に財団法人山形県埋蔵文化財センターが設立されました。職員一同、県民と関係各位の要望に応え本県の埋蔵文化財保護のため一層の努力をいたす所存です。今後とも当センター発足の目的が遂行されるようご支援ご協力を賜わりたくお願い申し上げます。

本書が文化財保護活動の啓蒙普及、学術研究、教育活動などにおいて皆様のご理解の一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成6年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 木場清耕

## 例　　言

- 1 本書は建設省長井ダム建設付替県道工事事業に係る「小豆澤館跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は建設省東北地方建設局長井ダム工事事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記のとおりである。

遺跡名 小豆澤館跡 (D N I A S) 遺跡番号 平成3年度登録  
所在地 山形県長井市平山字小豆澤2758-9ほか  
調査主体 財団法人山形県埋蔵文化財センター  
調査期間 発掘調査 平成5年4月1日～平成6年3月25日  
現地調査 平成5年5月12日～平成5年6月17日 延べ27日間

### 発掘調査担当

調査研究課長 佐々木洋治  
主任調査研究員 佐藤 庄一  
調査研究員 伊藤 邦弘

### 資料整理担当

調査研究課長 佐々木洋治  
主任調査研究員 佐藤 庄一  
嘱託職員 黒坂 広美

- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、建設省東北地方建設局長井ダム工事事務所、長井市教育委員会、長井市平野地区公民館等関係機関の協力を得た。現地調査と報告書作成に当って、岩崎義信氏からご指導を賜った。ここに記して感謝申し上げる。
- 5 本書の作成・執筆は、佐藤庄一、黒坂広美が担当した。編集は、安部実、伊藤邦弘が担当し、全体については佐々木洋治が監修した。
- 6 出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

## 凡　　例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

S A……杭列 S B……建物跡 S D……溝跡 S F……土壙  
S K……土壤 S R……配石列 S X……性格不明遺構  
E B……柱穴 S……礫 R P……括土器

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。

- (1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
- (2) グリッドの南北軸は、N—7°22'—Eを測る。
- (3) 遺構実測図は1/40・1/200縮図で採録し、各挿図毎にスケールを付した。
- (4) 遺物実測図・拓影図は1/2・1/3・1/4で採録し、各々スケールを付した。
- (5) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。
- (6) 遺物観察中の( )内の数値は、図上復元による推定値、または残存値を示している。また、出土地点欄の層位で、Fは遺構覆土内出土、ローマ数字(I～V)は遺跡を覆う土層(基準層序)を示している。
- (7) 遺構覆土の色調の記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に掲った。

## 目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過	1
II 遺跡の立地と環境	3
III 検出された遺構	
1 遺跡の層序	4
2 西地区	4
3 東地区	10
IV 出土した遺物	
1 繩文時代	11
2 歴史時代	16
V まとめ	
1 遺物について	17
2 遺構について	17
報告書抄録	18

## 表

表 1 石器觀察表	16
-----------	----

## 挿 図

第 1 図 調査区概要図	2
第 2 図 小豆澤館跡位置図	3
第 3 図 西地区遺構配置図	5
第 4 図 A・B 区の遺構	6

第5図	S B 6・7建物跡等平面図	8
第6図	西地区土層断面図	9
第7図	東地区遺構配置図	10
第8図	縄文土器拓影図等	12
第9図	石器実測図(1)	13
第10図	石器実測図(2)	14
第11図	石器実測図(3)	15

## 図 版

図版 1	遺跡遠景	西地区遠景
図版 2	西地区発掘状況	東地区遠景
図版 3	S D 1・S F 2 遠景	S D 1・S F 2 近景
	S D 1・S F 2 北側土層断面	S D 1・S F 2 南側土層断面
	S R 3・S R 5 配石列近景	
図版 4	S B 6 建物近景	S B 7 建物近景
	S B 7 建物礎石	S B 6 建物柱穴
	S B 6・7 建物遠景	
図版 5	B 区東壁南側土層断面	B 区東壁北側土層断面
	B 区南壁土層断面	E 区南壁西側土層断面
図版 6	東地区全景	東地区全景
図版 7	縄文土器	
図版 8	石器(1)	
図版 9	石器(2)	
図版10	石器(3)	中世陶器



## I 調査の経緯

### 1 調査に至る経過

小豆澤館跡は、山形県の中世城館址調査に関連して、平成3年12月長井市教育委員会によって新しく発見された城館跡である。標高287mの山頂を中心に、東・南・北側斜面に遺構が築かれており、西に急峻な朝日山系を背後にし、北には東西に流れる野川を配した自然の要害をうまく利用した城館跡とされている。長井市教育委員会の調査では、500分の1の詳細な図面が作成されている(文献2)。時代は中世にあたり、館跡のかたちから室町時代頃と思われるが、文献に直接該当する記載はなく、館主も不明である。しかし、昭和9年までは館跡の頂上に羽黒神社が祭られ、地元では、「お羽黒やま」とよばれていた。

この地に、長井ダム建設のための付替県道工事が計画されたため、平成4年7月10日に山形県教育委員会が道路予定地に限定して遺跡詳細分布調査を実施した。分布調査では中世の建物跡の礎石根固め石や繩文時代の土器・石器が確認されている(文献3)。この調査内容をもとに、山形県教育委員会が関係機関と遺跡の保存等について協議を行った結果、財団法人山形県埋蔵文化財センターが建設省東北地方建設局長井ダム工事事務所から今回委託を受け、小豆澤館跡について発掘調査を行うことになったものである。

### 2 調査の経過

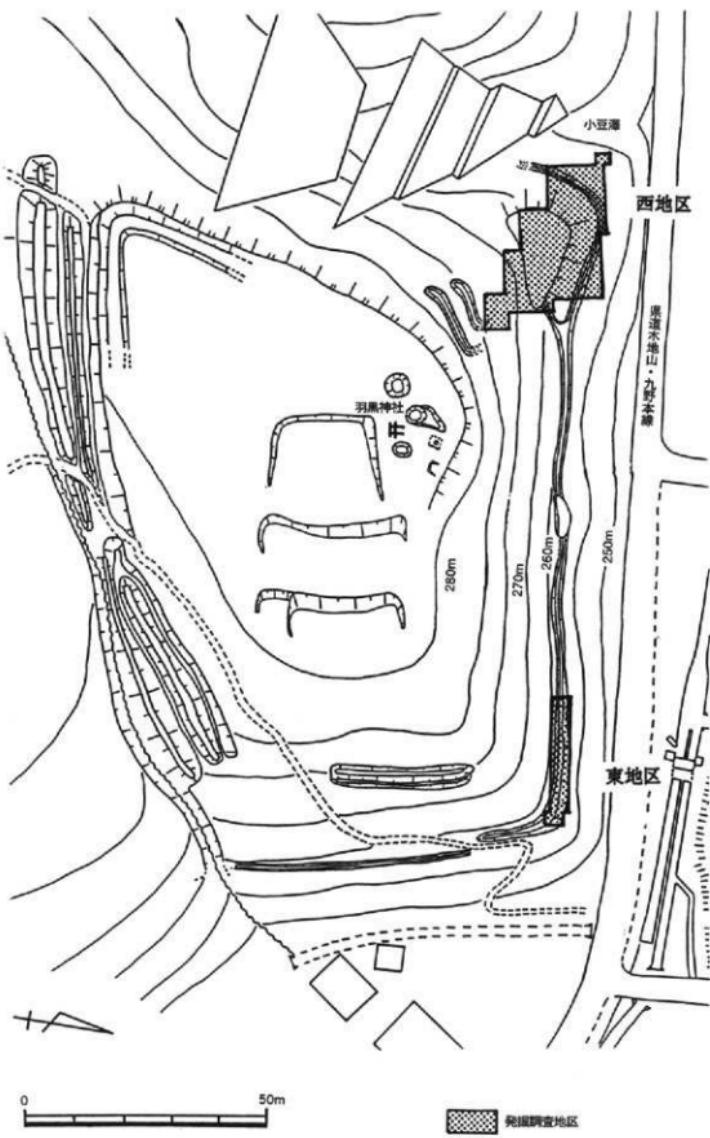
小豆澤館跡の範囲は、長井市教育委員会の調査によって東西160m、南北120mの広がりと考えられるが、今回の調査区域は、付替県道工事部分に限定している。道路は館跡の北端部を東西に横切ることになる。ただし、館跡にかかる道路予定地の中央部は急斜面で調査が出来ないため除外した。

発掘調査は平成5年5月12日から開始し、まず調査区域について手掘りによる木の根や表土の取り除きから始めた。調査区域は西地区と東地区に分け、計画道路の中心杭を基準に2mを単位とするグリッド(方眼の枠目)を設定している。丘陵の斜面の発掘のため、廃土を捨てるための土留め施設の設置や作業の安全対策にかなりの労力を要した。

つぎに、西地区について土の状態を観察しながら、ジョレンで少しづつ全体の面を削り遺構(土塁や柱穴など)の検出や出土遺物(土器や石器)の確認を行った。西地区からは土塁や溝跡の他に、建物跡の礎石や掘り方を伴う柱穴等が検出された。また、この作業と平行して写真撮影や平面及び土層断面の実測などの諸作業を進めた。諸記録の作業が終了したものについては、遺物の取り上げを行っている。

さらに東地区についても同様な調査を行った。東地区からは小豆澤跡のもっとも下にある曲輪や、土塁の一部が検出された。

発掘調査の最終日前日にあたる6月16日に、調査の成果を地元の方々や関係者等に知っていただくための調査説明会を館跡現地で行い、多くの参加者をえた。発掘調査は6月17日に完了し、器材撤収等を行った。



第1図 調査区概要図

## II 遺跡の立地と環境

小豆澤館跡は、長井市街の西方5.5km、道照寺平スキー場の東側にあり、朝日山系の麓、通称「西山」と呼ばれる山麓から東に向けて張り出した丘陵の先端に位置する。地目は、ほとんどが松や雜木の林になっており、標高は250~280mを測る。

山頂付近は東側に傾く緩斜面で、數カ所の曲輪（平場）がみられるが、西側は急峻な斜面となる。北側斜面は等高線の間隔からも窺われるよう、急な斜面となっているものの中腹には幅1~2mの帯曲輪が築かれている。また、2カ所にテラスもみられる。

東斜面は下位に帯曲輪、上位に帯曲輪と土塁が築かれている。南側には深さ約2~3mの沢が走っており、隣接する山との境界線の役割を果たしているかのようである。また、沢と平行して幅約2~4mの2条の帯曲輪と土塁が併走し、その高低差は4mにおよぶ箇所もみられる。

長井市や飯豊町には、「白山森館」や「椿館」などの大きな城館跡があり、小豆澤館跡の周囲にも、「小坂館」や「片倉館」などの平野部の館跡が多くみられる。平野部の館跡は方形に堀跡を巡らしたもので、大きさは100~200m四方のものが多い。これらは小豆澤館跡と対をなして構築されたものと考えられることから、山の城館跡と平地の館跡の組合せが今後の検討課題となる。



第2図 小豆澤館跡位置図 (S = 1 : 50,000)

- |         |        |        |        |           |
|---------|--------|--------|--------|-----------|
| 1 小豆澤館跡 | 2 高麗遺跡 | 3 南鶴石館 | 4 小坂館  | 5 片倉館     |
| 6 正福寺館  | 7 今城館  | 8 浦原館  | 9 白山森館 | 10 長者屋敷遺跡 |

### III 検出された遺構

#### 1 遺跡の層序（第4・6図）

遺跡は葉山山地の山麓にあり、基本となる土壌は褐色森林土壌である。山腹から沢沿いや山麓にかけて、土壌水分供給の豊富な箇所に分布し、かなりの深さまで腐植土の浸透がみられる。第4図は西地区の南壁土層、第6図は西地区東壁土層と西地区中央の南壁土層を実測したもので、これをもとに遺跡の基本層序を述べる。

第I層 7.5Y R3/4 暗褐色微砂

(表土：草や木の根が全体に入り込む腐植土。遺物は含まない。)

第II層 7.5Y R5/6 明褐色微砂

(暗褐色シルト粒・小礫を含み、固くしまっている。遺物を小量含む。)

第III層 7.5Y R3/3 暗褐色微砂

(細粒・小礫を含み、固くしまっている。遺物を小量含む。)

第IV層 10Y R4/3 ぶい黄褐色微砂

(無遺物層；細砂・小礫を含み、粘性があり固くしまっている。)

第I層の表土は、調査区全体に5cmほどの厚さで広がっているが、斜面では約10cmと厚くなる。第II層は、調査区全体に15cmほどの厚さで広がっているが、斜面では約20~30cmとかなり厚くなる。第III層は、調査区全体に20cmほどの厚さで広がっており、斜面にはあまりみられない。第IV層は、調査区全体に厚く堆積しており、本館跡の基盤層の一部と思われるが、調査では表面のみの検出に止まっている。

#### 2 西地区

今回の調査の西地区は、館跡の北西の張り出し部にあたる。西地区の上の部分では館跡の平場を囲む土壠（S F 2）と浅い空堀（S D 1）が検出された。その下の斜面には野川から運んだ川原石が列をなして並んでおり、斜面の崩れを防ぐ土留め用の石と思われる。

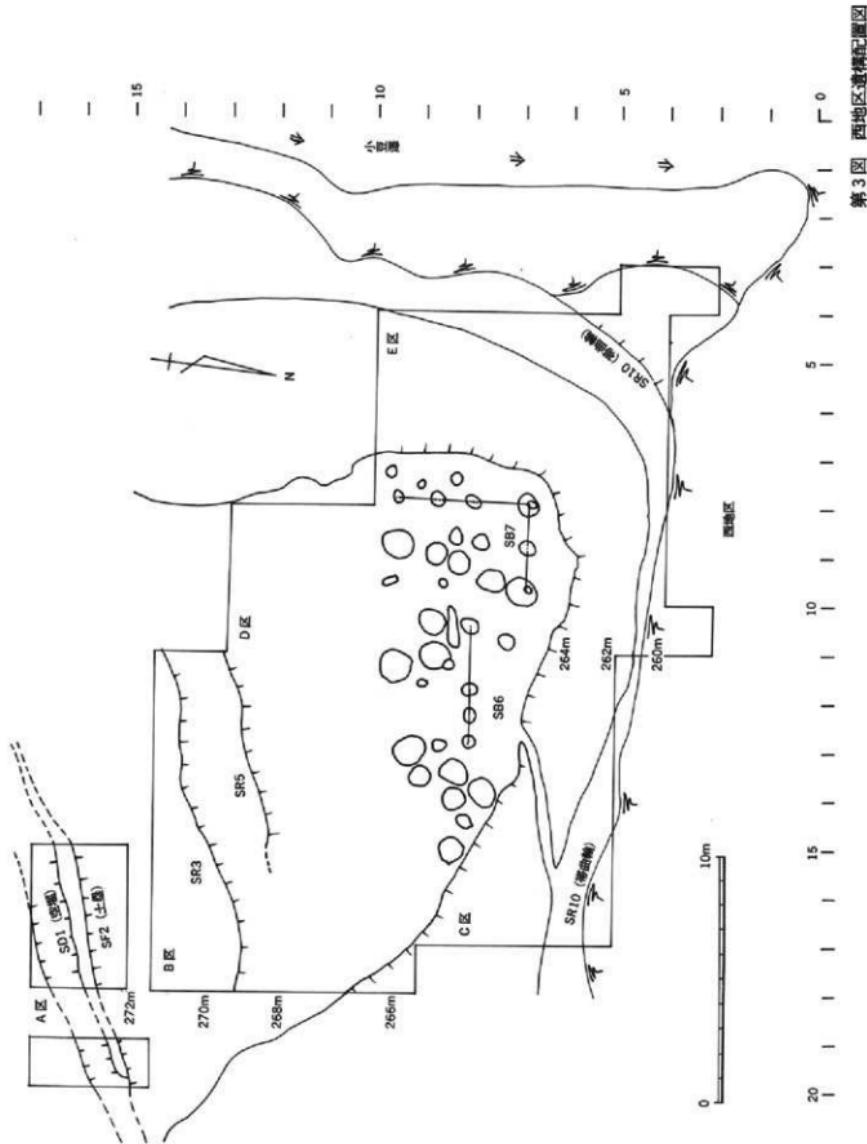
斜面の下には、地面を整地して平らにした場所があり、そこから柱穴や礎石ないし礎石を乗せるための根固め石が数多く検出された。整地箇所の下は急な斜面となり、さらにその下に細長い平場（帶曲輪）がみられる。

##### (1) S D 1 溝跡・S F 2 土壠（第4図）

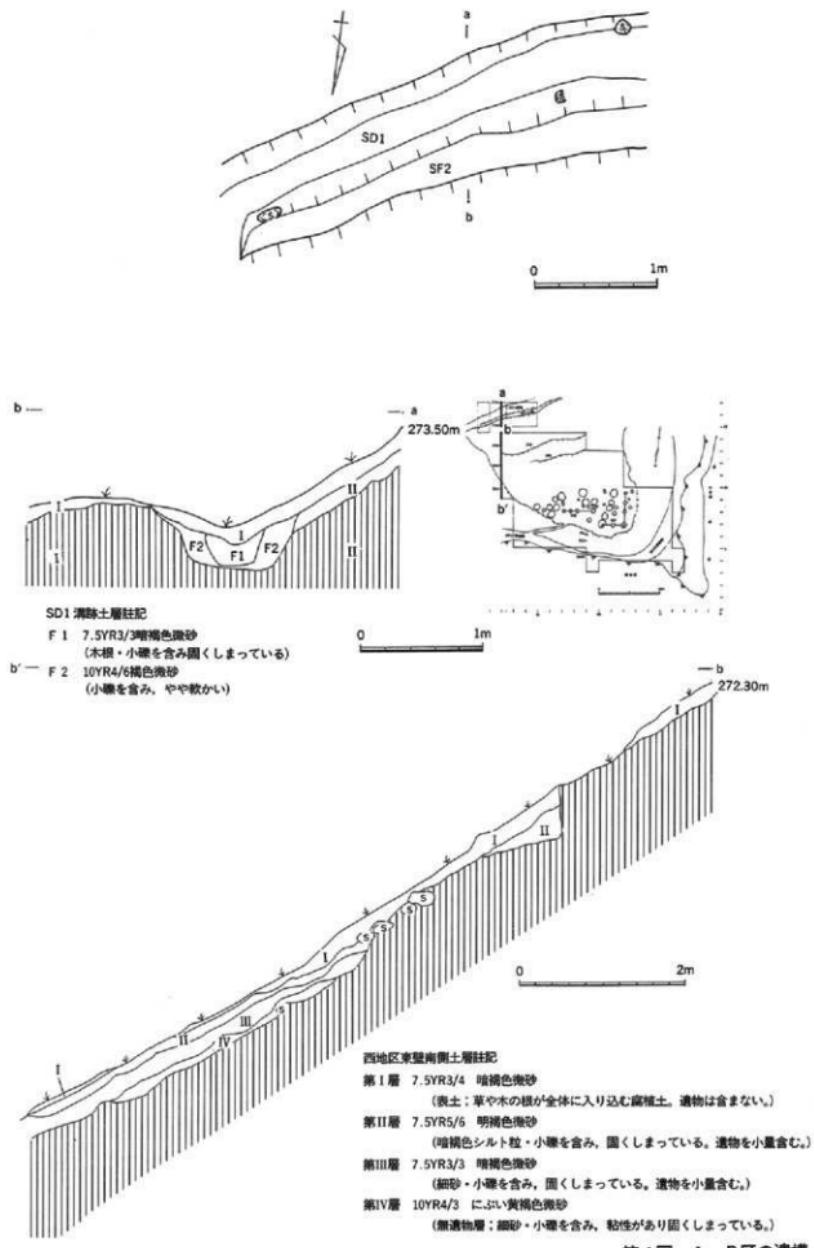
西地区南東隅、16~20~15~17G検出された土壠と溝跡で、両者が対になる遺構である。長井市教育委員会の調査段階ですでに確認されており、今回の調査区の西側にもさらに延びる。東側は自然に途切れ急斜面に続く。

S D 1 溝跡は、上幅が60~80cm、下幅が25~40cmあり、S F 2 土壠の上面から溝跡の底までは最大部分で約60cmを測る。底部はほぼ平坦で、覆土は二層に分けられる。覆土2層の上面から縄文時代の石器剣片がまとまって出土している（第9図2、第10図11、第11図9）。出土状況からみて、上面の館跡本体部から流れ込んできたものと思われる。

S F 2 土壠は、上幅が20~45cm、下幅が1m前後あり、土壠としては小規模である。



III 検出された遺構



第4図 A・B区の遺構

## (2) S R 3・5配石列 (第3図、図版3)

西地区南東部分、11~18-13~15Gで検出された2条の配石列である。

S R 3配石列は、S D 1溝跡・S F 2土壙に平行するように東西方向に並び、さらに調査区外にも東西に延びるものと思われる。斜面の等高線に沿って、人頭大の川原石と小さな角砾がやや蛇行しながら一列に配置されている。配石列の東側からは、石に混じり縄文時代の石器も検出されている(第10図1、第11図3)。

S R 5配石列は、S R 3配石列の下面2~3mから検出されたもので、S R 3配石列とほぼ平行する。S R 3配石列に比べて石の配置が疎らであるが、核となる川原石はよく残っている。東側は木の根によって攢乱されており不明瞭であるが、本来は東西に列をなしたものと考えられる。両配石列のすぐ下から斜面が急になることも考慮すると、斜面の崩れを防ぐ土留め用の石と思われる。

## (3) S B 6・7建物跡 (第5図、図版4)

西地区的北側中央部、7~16-7~10Gで検出された2棟の建物跡である。両建物跡が乗る面は、本調査区の中で唯一の広い平坦面で、斜面寄りの地層には整地のための盛土が施されている。

柱穴と推定されるものには、礎石ないし礎石を配置するための根固め石を有するものと振り方及び柱アタリのみ有するものの二種類がある。

S B 6建物跡は、E B 18~21の4個の柱穴が東西に並ぶものである。柱穴は直径約50~60cmの円形ないし梢円形を呈し、柱間は東から各々3.3m、2.1m、2.7mを測る。E B 20・21には根固め石が認められる。

S B 7建物跡は、E B 22~27の7個の柱穴がL字形に並ぶもので、建物の向きはS B 6建物跡と同じである。柱穴は直径約50~130cmの梢円形を呈し、柱間は東西方向が1.8m等間、南北方向が北から各々2.4m、1.2m、1.8mを測る。E B 22・24には根固め石の一部と思われるものが認められる。

上面から流失したと考えられる石が散乱していることと、数回の立て替えが予測されることから、建物跡全体の配置は把握出来なかったが、あるいは両柱列が同一の建物跡を構成するかもしれない。この場合、両柱列は建物の廊となり、E P 11~16等が母屋の柱穴となる可能性もある。

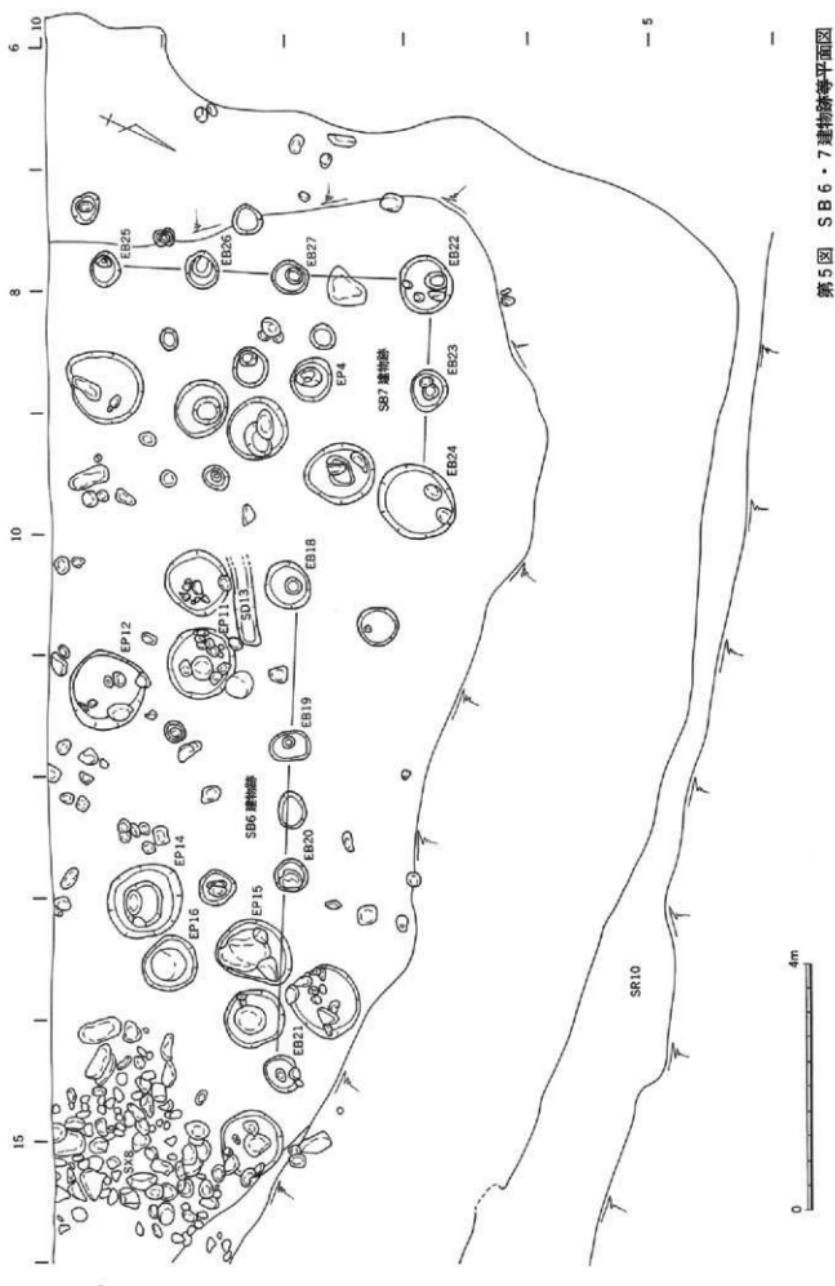
遺物は、E P 11~16の中及び周囲から縄文土器と石器が発見されている。またS D 15の周囲から1点中世陶器片が検出されている(第8図18)。

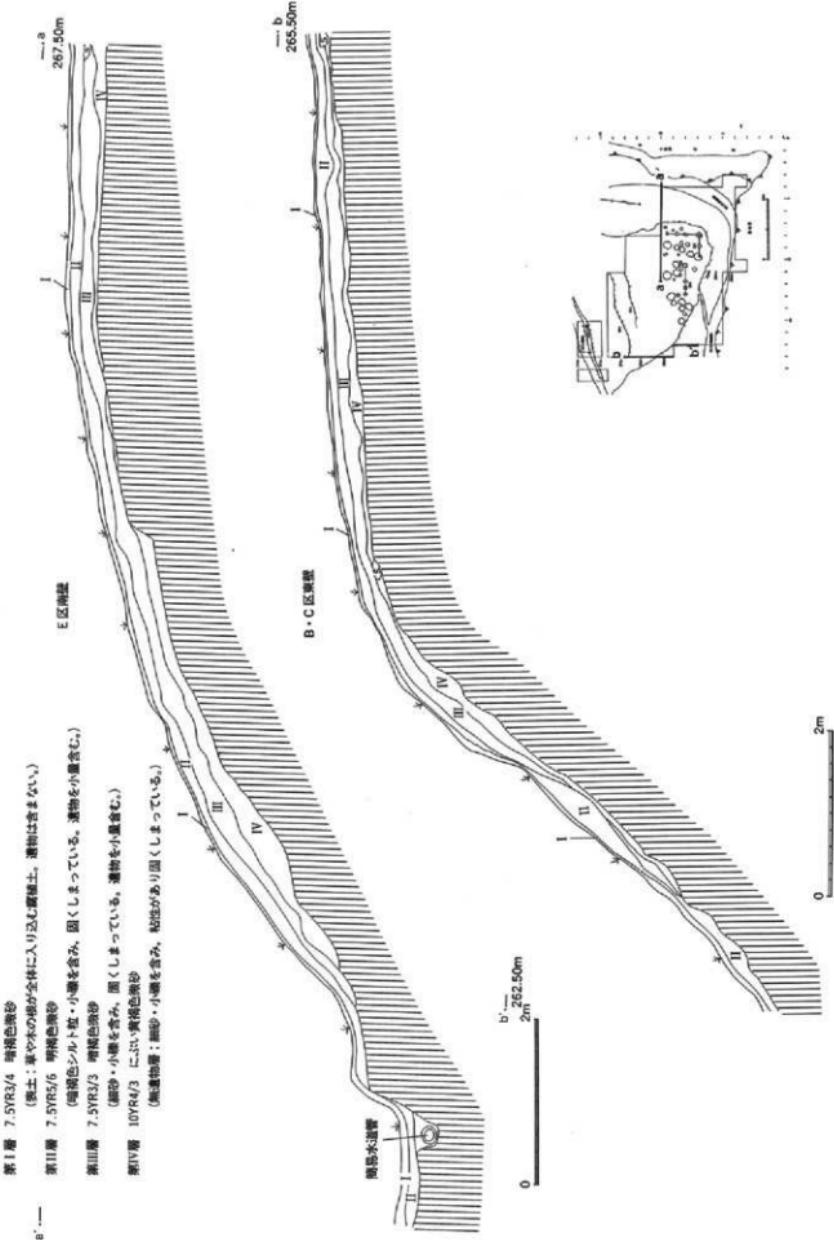
## (4) S R 10帶曲輪 (第3図)

S B 6・7建物跡に続く急斜面の下に巡る幅1.8~2.7mの平場である。小豆澤館跡には頂上から数えて2~3条の帶曲輪が巡るが、その最下端に位置するものである。曲輪は斜面を削平して構築したもので、整地や土壙等の痕跡は認められない。

帶曲輪の北面は、一部削平されている箇所もあるが全体としてよく残っている。これに対し、帶曲輪の西面は、沢に近付くにつれてその輪郭が不明瞭になっていく。

III 検出された遺構





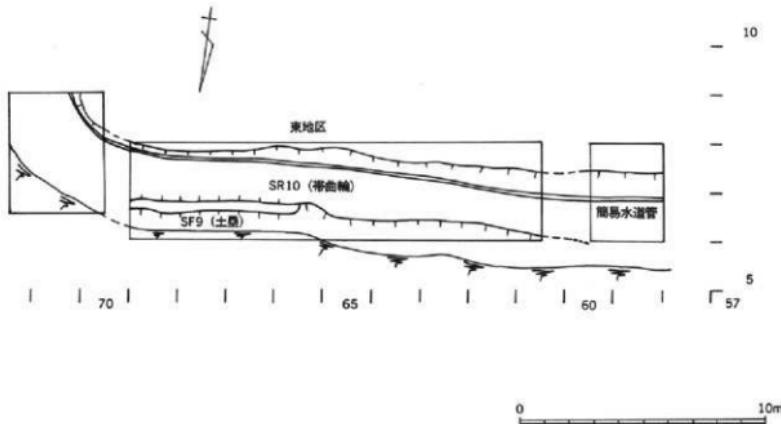
第6図 西地区土層断面図

## 3 東地区（第7図、図版6）

東地区は、館跡北東隅の狭い平坦部にあたり、100m<sup>2</sup>を調査発掘した。本地区では、西地区で検出された帶曲輪（SR10）の延長部分を検出している。

帶曲輪の幅は2.1～2.8mで、東西方向に延びる。東側には一部土塁の痕跡（SF9）と見られるものも、約7mの長さで確認されている。SF9の西側は、現地の削平もあり確認出来なかった。SR10帶曲輪は、地山の固い岩石層を急勾配に掘削して平坦面を作り出しており、整地層は認められない。北側は急角度の斜面となっており、現県道との比高は約12mを測る。調査区の東端で南方に屈曲し、さらに15mほど南側に続いて、一旦平場を閉じる。

SR10帶曲輪は、長井市教育委員会の確認調査では総延長が100mを超えると推定されている。現在、SR10帶曲輪上の大部分に、付近の民家に小豆沢から水をひくための簡易水道管が設置されており、第7図にもその位置を示した。これについては、江戸時代末から明治始めの頃に一時用水路の建設を実施したが、難事業のため中途で断念したとの話が残されている。SR10帶曲輪をこの時の平坦面と考える向きもあるが、水路建設に必要な場所以外にも平坦面が形成されていることと、他の場所にもいくつかの帶曲輪が認められる事から、中世に館跡の施設としてまず帶曲輪が作られ、その後その平場を利用して用水路の建設が計画されたと考えるほうが妥当であると思われる。現在の簡易水道管はさらにその上に築かれたものである。



第7図 東地区遺構配置図

## IV 出土した遺物

今回の発掘調査では、西地区の整地箇所から、縄文時代の土器や石器等の遺物が整理箱にして3箱分出土している。箇跡に直接関連する遺物は、山茶椀片1点のみである。

### 1 縄文時代

縄文時代の明確な遺構はなく、遺物は箇跡の整地層や溝跡から出土することから、縄文時代の集落跡が山の上の平場にあり、それらが上から斜面に流れこんできたと思われる。

#### (1)縄文土器 (第8図、図版7)

完形や復元可能な土器ではなく、すべて破片である。これらの土器について、胎土、器形、文様構成、施文方法等から6類に分類して説明する。

①第1類：胎土に纖維を含み、外面に貝殻条痕文が施されるもの(第8図1)。器形は深鉢で、西地区13-10G II b層から1点出土している。

②第2類：胎土に纖維を含み、外面に粗い斜縄文、内面に貝殻条痕文が施されるもの(同図2)。器形は深鉢で、西地区14-12G III層から1点出土している。

③第3類：纖維を含まず、外面にもLR斜縄文が施されるもの(同図3・6)。器形は深鉢で、西地区北半II層から2点出土している。

④第4類：纖維を含まず、外面に細い刷毛目文が施されるもの(同図4・5)。器形は深鉢で、西地区北半III層から2点出土している。

⑤第5類：纖維を含まず、細い縄文と沈線をもつ薄手の土器(同図7)。器形は浅鉢ないし壺形で、西地区南半III層から1点出土している。

⑥第6類：纖維を含まず、外面に粗い平行沈線による曲線文が施されるもの。SB7建物跡E B27柱穴の西脇斜面近くから、同一個体と思われる縄文土器片がやまとまって発見されている(RP4；同図8～14)。

器形は平坦口縁を有する深鉢で、体部下半は無文となる。第8図16と同17の底部も同じ個体になるかもしれない。

#### (2)石器 (第9～11図、図版8～10)

石器の出土状況も、縄文土器と同じく箇跡の整地層や溝跡から出土したものが大半を占める。打製石器と磨製石器があるが、器種や形態等から8類に分類して説明する。

①石 鋼：やや大型の石鋸が1点出土している(第9図1)。基部は平らで、両面に押圧刺離が施されている。

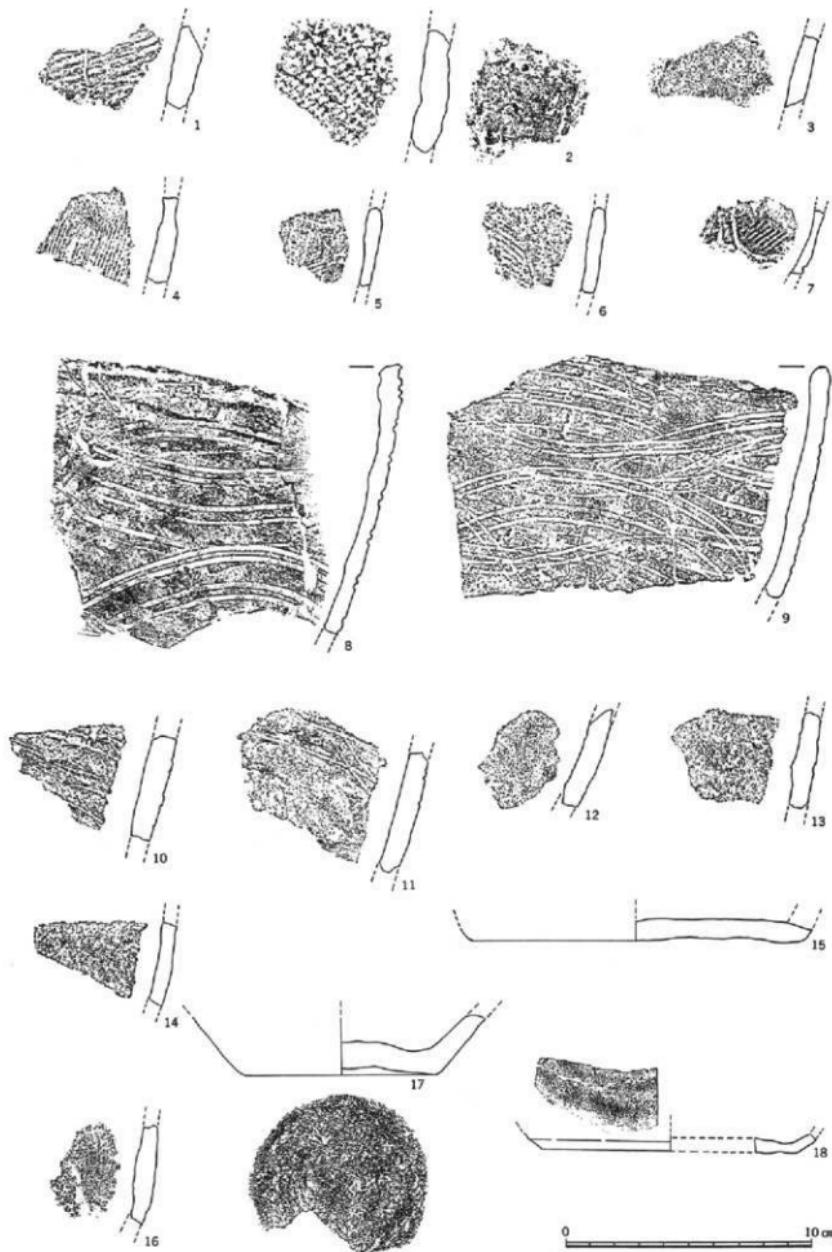
②石 箕：縱長の剥片を用い、その両側に二次調整を施しているもの。側刃の調整が頗著で、刃部は緩やかな角度を有する。形態や調整刺離のあり方から三つに分けられる。

a. 正面の調整刺離を主とし、裏面は縁辺にのみ調整があるもの(第9図2・3)。

b. 両面に調整刺離があり、刃部が丸味を有するもの(同図4・6)。

c. 両面に調整刺離があり、刃部が平らなもの(第10図1)。

IV 出土した遺物



第8図 縄文土器拓影図等

③櫛 器：縦長の剝片を用い、主として正面に二次調整を施しているもの。刃部が急角度に調整されている。形態や調整剝離のあり方から二つに分けられる。

a. 刃部の両面に調整剝離を有するもの（第9図5）。

b. 刃部の正面のみに調整剝離を有するもの（第10図2）。

④打製石斧：長軸が長く厚みのある剝片を用い、両面に二次調整を有するもの（第10図3）。打面が僅かに残っており、刃部の調整はあまり顕著でない。

⑤不定形石器：二次的な調整がある剝片を一括して不定形石器と分類した。形態や調整剝離のあり方から三つに分けられる。

a. ほぼ全縁辺に調整剝離があるもの（第10図6・8、第11図6）。

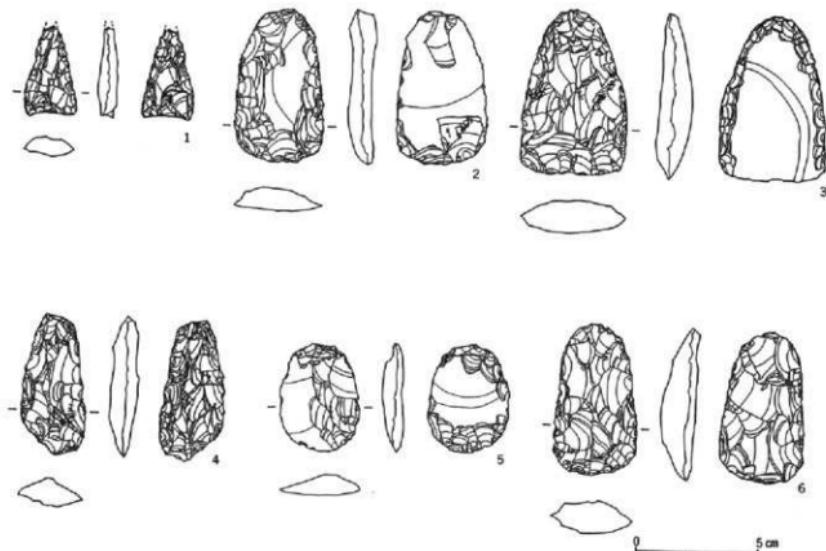
b. 剥片の側縁辺に調整剝離があるもの（第10図4、第11図4など）。

c. 剥片に1～2回の調整剝離があるもの（第10図5・9、第11図5・7など）。

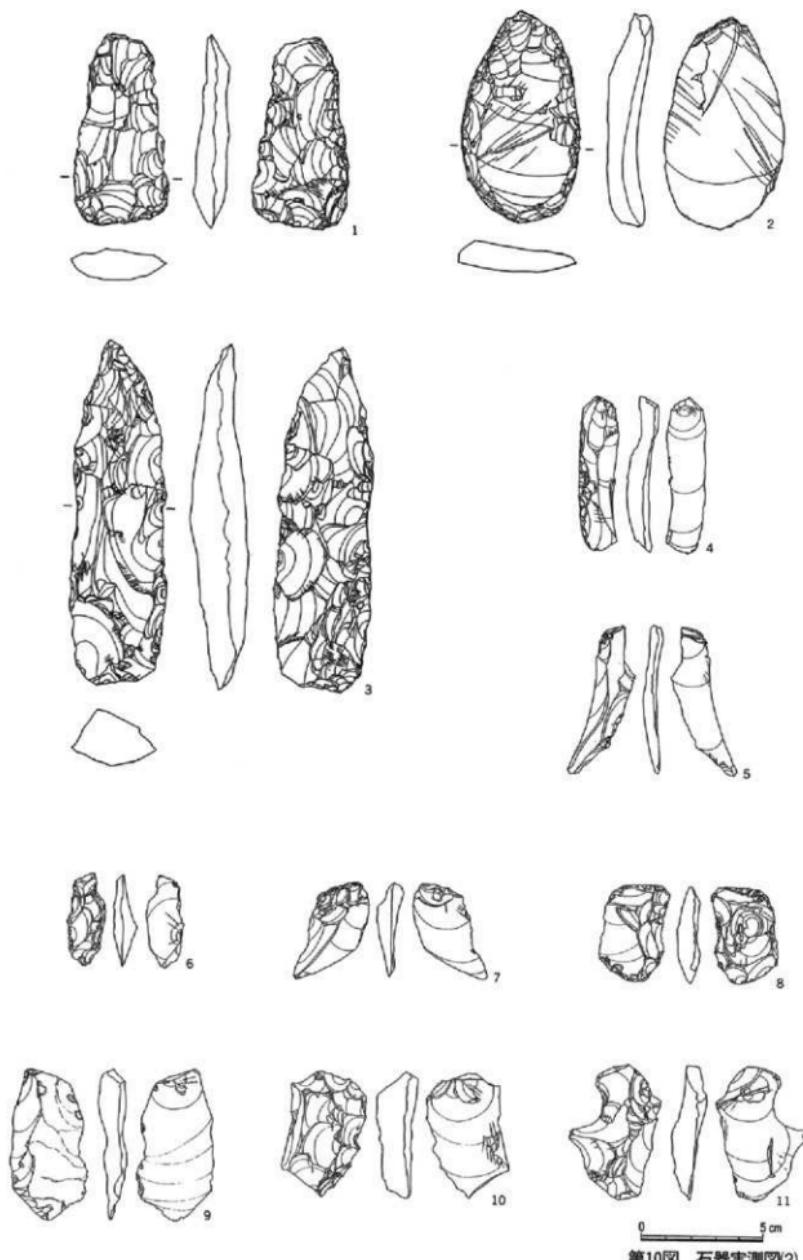
⑥石 片：石器製作の過程で、母材の石塊から打ち剥がされたもので、これまでのどの分類にも属さないものを石片とする。これには剝片、チップがある。

⑦凹 石：自然礫の表裏面に窪みを有するものを一括してこのグループに含める。SD 1溝跡から1点出土している（第11図9）。

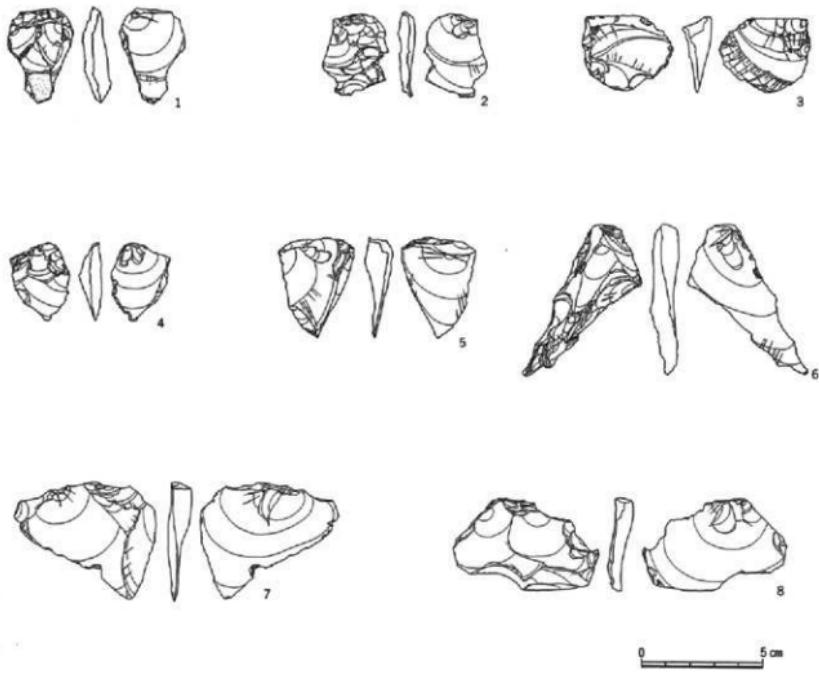
⑧石 棒：円柱状の自然礫の全面を研磨して、断面蒲鉾形の石棒を作り出しているもの（第11図10）。西地区中央から1点出土している。



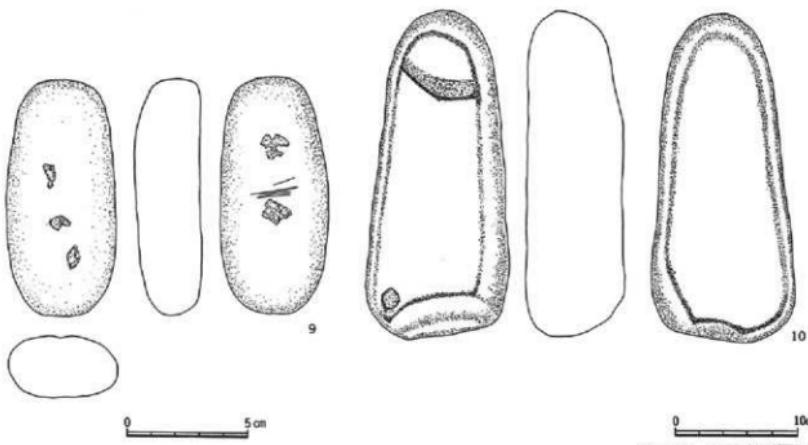
第9図 石器実測図(1)



第10図 石器実測図(2)



0 5 cm



0 5 cm

0 10 cm

第11図 石器実測図(3)

表1 石器観察表

標 番 号	図 版 号	器 種	出土位置	法 量(cm)			重 さ (g)	調 整		材 質	分 類
				長 さ	幅	厚 さ		正 面	背 面		
9-1	8	石 磨	11-10-II b	(2.1)	2.1	0.8	5.7	全体調整	全体調整	珪質頁岩	①
2	#	石 瓶	SD 1-F 2	6.3	3.6	0.9	25.5	全体調整	縁辺部調整	#	②-a
3	#	#	10-9-II b	6.7	4.4	1.3	38.5	全体調整	縁辺部調整	#	②-a
4	#	#	16-10-II b	5.8	2.6	1.1	17.7	全体調整	全体調整	#	②-b
5	#	盤 器	12-9-II b	4.4	3.3	0.8	12.6	縁辺部調整	縁辺部調整	#	③-a
6	#	石 瓶	13-12G III	6.2	3.5	1.3	28.2	全体調整	全体調整	#	②-b
10-1	8	#	13-12G III	7.9	3.9	1.2	37.0	全体調整	全体調整	珪質頁岩	②-c
2	#	搔 器	9-11G II b	8.7	4.9	1.5	67.0	縁辺部調整	無 調 整	#	③-b
3	#	打 製 石 犁	12-9 G-II b	14.2	4.0	2.1	103.9	全体調整	全体調整	#	④
4	9	不定形石器	10-9 II b	9.4	2.3	1.1	26.0	縁辺部調整	無 調 整	#	⑤-b
5	#	#	12-9 II b	9.6	2.3	0.8	14.4	打面調整	打面調整	#	⑤-c
6	#	#	12-14II b	5.7	2.3	0.9	10.6	全体調整	無 調 整	#	⑤-a
7	#	#	11-8 II b	7.0	3.3	1.1	18.5	打面調整	打面調整	#	⑤-c
8	#	#	9-9 II b	5.8	3.8	0.9	23.7	縁辺部調整	全体調整	#	⑤-a
9	#	#	10-9 II b	9.2	4.6	1.7	60.7	數回調整	數回調整	#	⑤-c
10	#	#	11-9 II b	7.4	4.5	2.4	82.0	縁辺部調整	打面調整	#	⑤-b
11	#	#	SD 1-F 2	8.1	5.1	1.7	50.2	數回調整	數回調整	#	⑤-c
11-1	10	不定形石器	11-10II b	5.9	3.8	1.1	26.5	縁辺部調整	縁辺部調整	珪質頁岩	⑤-b
2	#	#	13-12III	5.2	3.9	0.8	16.0	數回調整	打面調整	#	⑤-c
3	#	#	18-14III	5.6	4.6	1.5	36.5	縁辺部調整	數回調整	#	⑤-b
4	#	#	13-9 II b	4.6	3.3	1.3	17.8	數回調整	縁辺部調整	#	⑤-b
5	#	#	14-9 II b	6.1	4.5	1.5	30.8	打面調整	打面調整	#	⑤-c
6	#	#	11-9 II b	10.6	4.4	1.5	44.6	全体調整	縁辺部調整	#	⑤-a
7	#	#	12-9 II b	5.7	8.5	1.1	38.6	打面調整	打面調整	#	⑤-c
8	#	#	11-9 II b	5.3	8.8	1.1	35.0	縁辺部調整	數回調整	#	⑤-b
9	#	凹 石	SD 1-F 2	12.9	5.9	3.4	379.0	凹部あり	凹部あり	泥 岩	⑦
10	#	石 拙	13-10-II b	35.6	13.9	10.4	8900.0	研磨面あり	研磨面あり	花崗岩	⑧

## 2 歴史時代

## (1)中世陶器(第8図、図版10)

今回の調査区は、小豆澤館跡の北端にあたるため、館跡に直接関連する遺物は陶質土器の破片1点しか見つかっていない。一番上の平場にある主体部を調査すれば、陶磁器や鉄製品が発見される可能性がある。

第8図18は西地区S B 6建物跡周辺から出土した壺の破片である。底部周辺にあたる小片で、推定底径は10.5cmを測る。内外面に明瞭なロクロ痕を残しているが、底部の切り離し技法は小片のため不明である。一見、須恵器の壺に似ているが、胎土や焼成が須恵器に比較して甘く、東海地方などで出土する山茶碗の仲間に似ている。遺物の詳細な時期は不明であるが、大略的には中世に属するものと推定される。

## V まとめ

今回の調査では、小豆澤館跡の北西の張出し部にあたる室町時代頃の遺構と、縄文時代の土器・石器などが検出された。調査の主な成果を次にまとめてみる。

### 1 遺物について

縄文時代の遺物は、館跡の整地層や溝跡から出土することから、縄文時代の集落跡が山の上の平場にあり、それらが斜面に流れこんできたと思われる。

縄文土器は破片で点数が少ないので時期の確定が困難であるが、IV章の土器分類のうち第1類と第2類は縄文時代早期末葉、第3類から第6類は縄文時代後期後半頃に属するものと推定される。

石器の中で、撫器や石箋の一部は縄文時代早期末葉のものに類似があり、その他の石箋と打製石斧等は縄文時代後期頃とも考えられるが、縄文土器との共伴関係が明らかでないため詳細は不明である。

今回の調査区は小豆澤館跡の北端斜面にあたるため、館跡に直接関連する遺物は陶質土器片1点のみであり、館跡の時期を決定するまでの資料の検出には至らなかった。

### 2 遺構について

今回の調査区のうち西地区は、館跡の北西の張り出し部にあたる。西地区的上面では館跡の平場を囲む土塁と空堀が検出され、その下から斜面の崩れを防ぐための土留め石が確認された。また斜面の下には整地を伴う平場があり、そこから建物を構成する二ヵ所の柱列が検出された。建物跡の下面是急な斜面をなし、さらにその下に帯曲輪が認められる。

室町時代の長井市は「長井莊（ながいのしょう）」と呼ばれ、米沢市もふくめて長井氏の一族が治めていた。鎌倉時代から室町時代にかけては「南北朝時代」ともよばれ、狭い地域でも兄が南朝につくと、弟が北朝について自分の力を広げるという状況で、小さな戦いがしばしばなされていたと考えられる。

置賜地方の長井氏は、1380年に福島県の桑折町を本拠とする伊達氏によって滅ぼされ、長井市付近はこの後伊達氏の支配の下に入る。小豆澤館跡や周辺の小坂館や片倉館等の平野部の方形の屋敷跡は、長井市におけるこれらの状況を物語る貴重な城館跡である。

### 参考文献

- 1 長井市、「長井市史第一巻 原始・古代・中世編」、1984年。
- 2 長井市教育委員会、「遺跡詳細分布調査報告書(5)」、長井市教育委員会、山形県長井市埋蔵文化財調査報告書第7集、1992年。
- 3 山形県教育委員会、「分布調査報告書(20)」、山形県教育委員会、山形県埋蔵文化財調査報告書第182集、1993年。

## 報告書抄録

ふりがな	あずきさわてあとはくつちょうきぼうこくしょ
書名	小豆溝跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第3集
編集者名	佐藤庄一・黒坂広美
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 0236-72-5301
発行月日	西暦 1994年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
小豆溝跡	山形県長井市 平山字小豆溝	6209	平成3年度登録	38度5分27秒	139度59分00秒	19930512~19930617~	600	長井ダム建設付替県道工事事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小豆溝跡	包蔵地	縄文時代 早期・後期	遺物包含層	縄文時代、石器(石鎌・打打製石斧・石箋・搔器・剝片)	
	城館跡	室町時代	土塁 溝跡 土留め配石 柱列 柱穴など	2条 2条 2条 2条	中世陶器

図 版



遺跡遠景（北から）

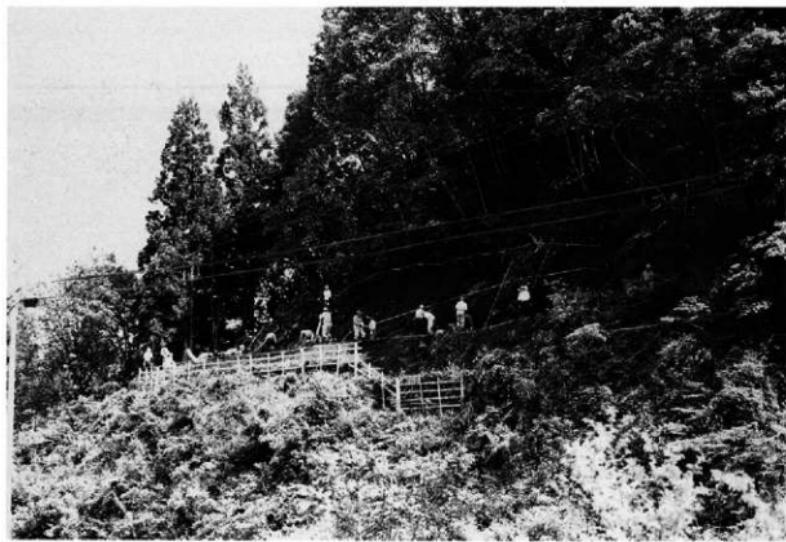


西地区遺跡（北から）

図版2



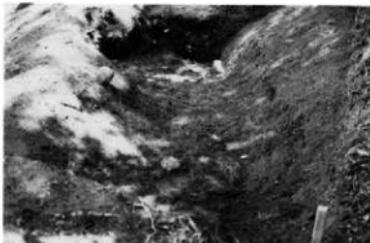
西地区発掘状況（西から）



東地区遠景（北西から）



SD 1・SF 2遠景



SD 1・SF 2近景



SD 1・SF 2北側土層断面



SD 1・SF 2南側土層断面



SR 3・SR 5配石列近景



SB 6 建物近景



SB 7 建物近景



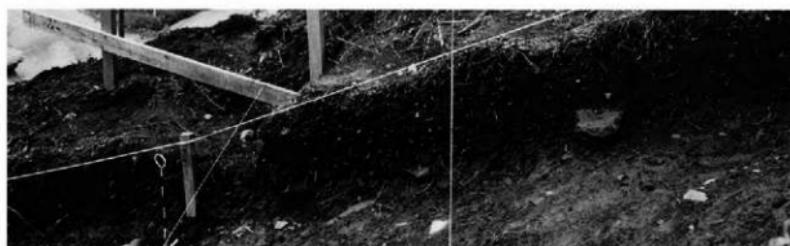
SB 7 建物礎石



SB 6 建物柱穴

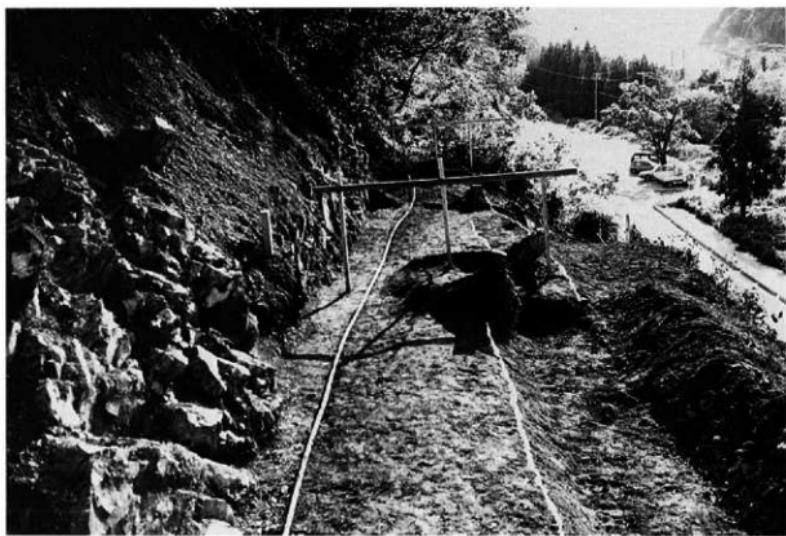


SB 6・7 建物遠景（南から）

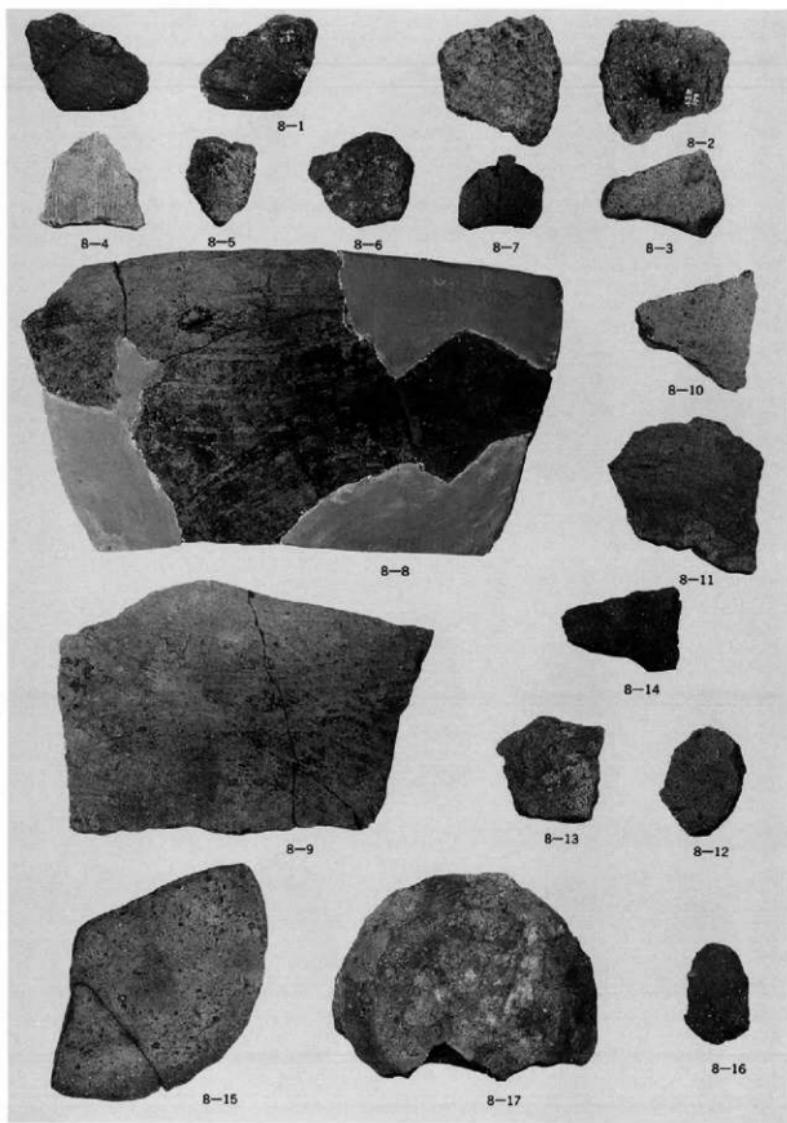




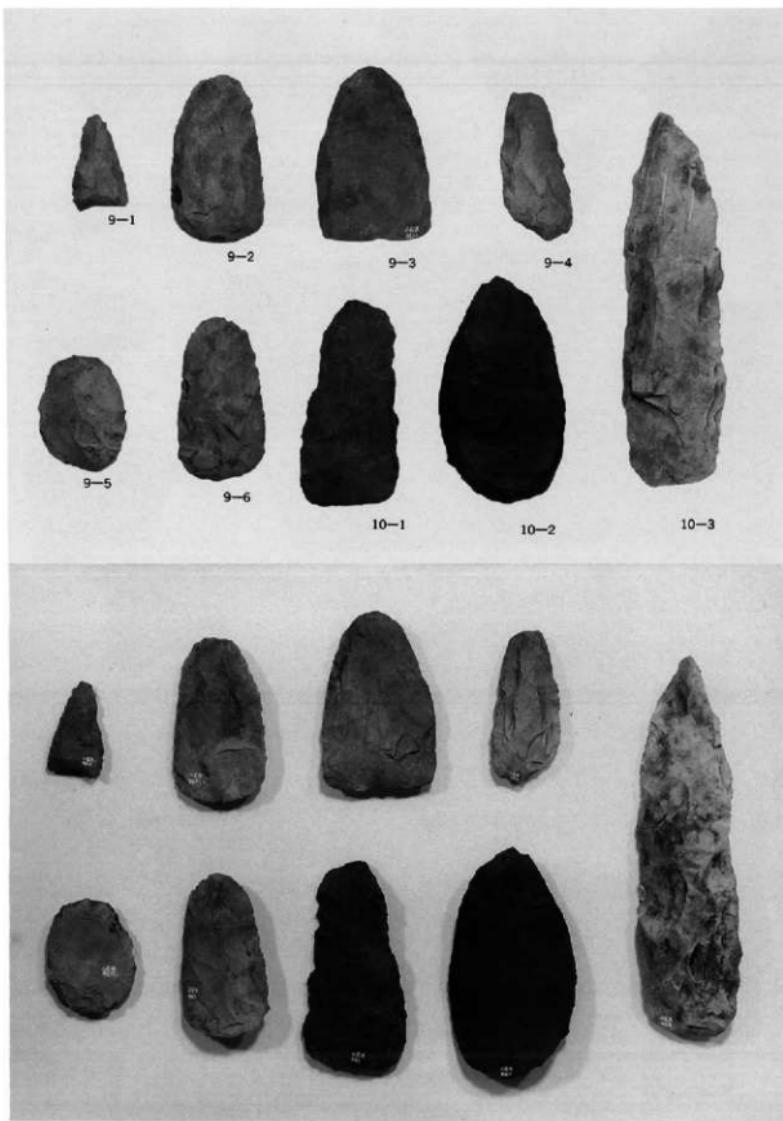
東地区全景（西から）



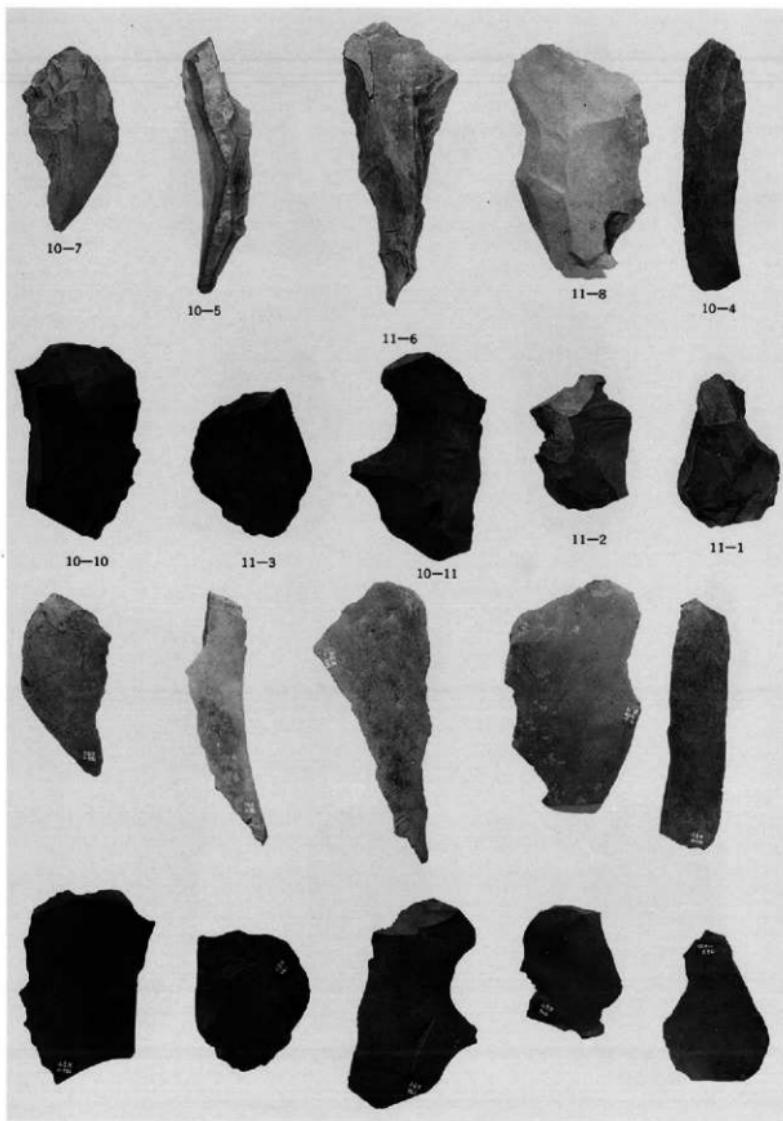
東地区全景（東から）



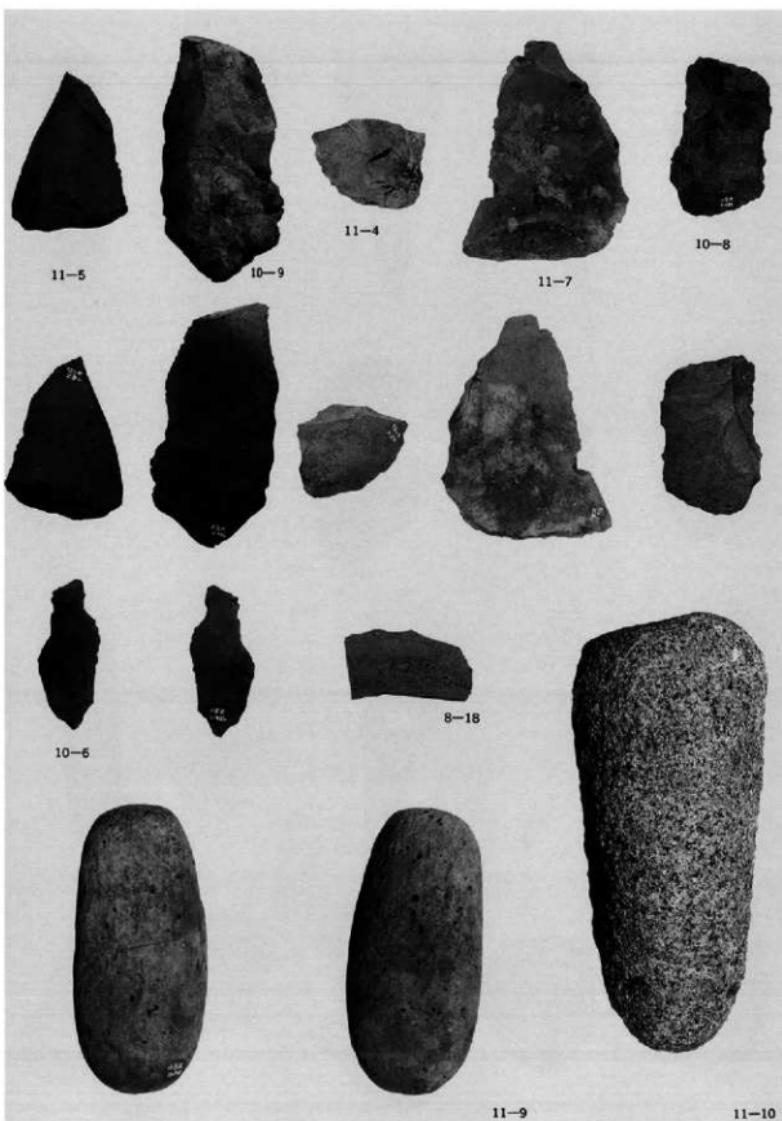
縄文土器



石器(1)



石器(2)



石器(3)・中世陶器

---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第3集

小豆澤館跡発掘調査報告書

1994年3月31日 発行

発行 財團法人 山形県埋蔵文化財センター  
〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号  
電話 0236-72-5301  
印刷 熊大風印刷

---